# 1 月 21 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　2：　1 – 11

## 「栄光を現された」

「奇跡を信じるか」と問われたら、何と返答するでしょうか。素直に「信じている」という人もいれば、斜に構えて「証拠があれば」という人もいるかもしれません。しかし、聖書には、人間が信じる、信じないを問わず、多くの奇跡物語が記されています。そのどれか一つでも自分の身に起これば、と願う人もあるでしょう。ただ、残念ながら、その願いが叶うことは少ないのが現実です。

古今東西、奇跡は多くの人の関心を集めてきました。また、宗教活動の勧誘にも用いられてきました。「ヨガを極めれば教祖のように空中浮遊ができる」とか、「祈りながら手をもみ合わせれば灰が出る」とか、30～40 年前は多くのニュースが世間を賑わせていたものです。もっとも、それらのほとんどはまやかしやインチキだったことが後に明らかにされています。奇跡を売り文句にした集団も、新鮮さを失うと簡単に解散したものでした。

しかし、イエスは奇跡を宣教の目的はおろか、手段としてさえ用いられません。ナタナエルが自分のことを当てられて驚いた時には、「見たと言ったので信じるのか」と一蹴されています(「ナタナエルは答えた。『ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。』イエスは答えて言われた。『いちじくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。』」ヨハネによる福音書 1:49-50)。また、トマスにも「見ないで信じる人は、幸いである。」と奇跡的な出来事をもってのみ信じることを戒められています(「イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。』」ヨハネによる福音書 20:29)。

イエスにとって奇跡とは、起こるべき時に、必要な場所で、起こるべくして起こる出来事なのであって、個人の評価を左右する出来事ではないからです。ほめたたえるべきはその奇跡を実現してくださった神の栄光であって、その働き手である人間ではないからです。

旧約聖書の時代、神の栄光は人の目から隠されていました(「わが栄光が通り過ぎるとき、……わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない。」出エジプト記 33:22-23)。それは、人間を守るための神の優しさでした(「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」出エジプト記 33:20)。

しかし今、神はその栄光をイエスという、目に見える形で私たちに与えられたのです。

「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」(ヨハネによる福音書 2:11)

弟子たちは奇跡を見たからイエスを信じたのではありません。現された神の栄光を見て信じました。人間には見ることができないと思っていた神の栄光が体現されていることを喜びました。そして、彼らはイエスを伝える者となったのです(「この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。」ヨハネの手紙一 1:2)。

今、イエスを直接見ることのできない私たちがイエスのことを、神のことを知り、次の世代に伝えていくことができるのは、弟子たちが伝えてくれたからこそです(「わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。」ヨハネの手紙一 1:3)。

私たちは聖書を通して、また先達たちの背中を通して、神を知り、イエスを知ります。神の愛を知り、神との交わりを体感します。時に言葉で、時に物言わぬ背中で、神の栄光は語り継がれていきます(「話すことも、語ることもなく／声は聞こえなくても／その響きは全地に／その言葉は世界の果てに向かう。」詩編 19:4-5)。

聖書の言葉を通して、今日、イエスはまた「栄光を現された。」私たちはその栄光を見ました。私たちは感謝して、栄光を語り継ぐ道へと招かれています。今、光を求める全ての人のために、祈り、語り継ぐ道へと。